

有機学際融合結晶部会？

京都大学 佐藤直樹

十年近く前に有機結晶部会設立 10 周年記念号のニューズレター (NL) 20 号、また、期せずして拝命した部会長重任の期首に 24 号の巻頭言を書かせていただきました。つい最近のことと書いていたらや 39 号とか。有機結晶シンポジウム (OCS) も 9 月で 25 回を迎える訳ですから、やはり時の確実な流れを感じます。

その間、本部会は有機結晶ディビジョン (e-div) と一体運営の下、様々な状況に接しつつも着実に活動してきたと思います。記憶に残る出来事を脈絡なく挙げてみますと…。まず、本部会の創設者で初代部会長の戸田英三夫先生が 2008 (平成 20) 年 2 月に急逝されたのは、痛恨の極みでした (NL 23 号は戸田先生追悼号)。広く柔軟なお考えでまだまだ部会をご指導くださっていても不思議はないのに…。同年夏には、第 2 代部会長の大橋裕二先生が、国際結晶学会の会長として第 21 回国際結晶学連合会議 (IUCr 2008 Osaka) を開催され、その前後の関連シンポジウムを含め、多くの部会員・e-div メンバーが積極的に参加しました。同秋の第 17 回 OCS (大阪大学吹田キャンパス) からはポスター賞 (2 年後からは講演賞も) の授賞が始まりました。なお、部会に係る最重要事項の「部会員数」は、この年度にいわゆる“幽霊部会員”を整理しました。これには慎重を期する意見もありましたが、健全な部会運営のため執行した次第です。これにより部会員数は約 3 割減少し、当時「部会固定費」の問題もあって予算的な厳しさも生じましたが、以来、日本化学会のご理解や何より役員・部会員のご尽力でその危機を脱したように思います。ただし、仲間を増やすこと、すなわち部会員増は常に留意事項ですので、その点お含み置き願えれば幸いです。

NL を編集する部会の広報委員会は、部会員にとって有意義な内容を常に目指し、2009 (平成 21) 年 3 月発行の 24 号から「研究室便り」の掲載を始めるなど、新たな試みを重ねています。また、部会としても、「有機結晶」を軸にして実は多岐にわたる分野をカバーしている部会の中に、より集中的な活動も行う「サブグループ」を 2009 (平成 21) 年度から設けました。最初は「有機粉末結晶構造解析」と「有機エレクトロニクス」の二つでしたが、2011 (平成 23) 年度から「液晶」を加え、各々が他の研究者団体等と連携しつつ特徴ある取組みを展開しています。

2011 年は 3 月に東日本大震災が発生し、日本中が本当にたいへんなことになりました。そんなことは思ってもいなかった本部会は、横浜で開催予定の日本化学会第 91 春季年会で、特別企画 12「有機半導体・伝導体の基礎・応用研究の最前線」を、有機結晶 e-div 初開催のアジア国際シンポジウム (APS)、アカデミックプログラム「有機結晶」部門発表と連動して行う準備をしていました。同月

初め刊行の「化学と工業」の「部会だより」でもそれらに触れ、部会や e-div の外へも参加を募り、その効果に期待しつつ…。しかし、震災に鑑みて年会自体が中止されたことは周知のとおりです。特に、プログラムに確定していた特別企画の（招待）講演者 6 名と APS の Lectureship Award (LA) 受賞者 3 名（インド、韓国、中国各 1 名）には申し訳ないことをしました。でも、当該年会の研究発表は「講演予稿集」で「発表」とみなし、事前審査で選定済みの LA は授与との化学会決定により、研究業績等として公認されることになったのは不幸中の幸いでした。なお、有機結晶 e-div が主催する APS については、2014（平成 26）年の第 94 春季年会で中国から 2 名の LA 受賞者を招いて名実ともに開催し、次は 2017（平成 29）年春に第 3 回を開くべく準備中と伺っています。

ちょっと振り返ったつもりが、過去のことばかり書き過ぎました。と言いつつ古い話で恐縮ですが、2008（平成 20）年頃 e-div ごとにまとめた「化学レポート：現状と将来」が今も化学会のホームページに掲載されています（<https://division.csj.jp/>）。16 番目が「有機結晶」で、当時その各方面をリードしていた方々が「将来」を見据えて記したレポート集ですが、十年近く経った現在、そのレポートを見返してみても如何でしょうか。記載時の「将来予測と方向性」の内容と今の「現状」を突き合わせてみて、予測の当否という話しではなく、今後を考える上で参考になる問題が少なからず認められるように思えます。もちろん、今の関心事の中には当時は採り上げられていなかったものがあってしかるべきですが…。

有機結晶部会は日本化学会の五部会中で目下最も少人数ですが、「有機」と「構造」を共通基盤としつつ生命から電子素子といった多岐にわたる方面で活躍する皆さんの集まりです。今しきりに言われている異分野融合を初めから特長としてきました。特に真の基礎研究の展開が少なからず危ぶまれるこの状況下で、その特長の実践・発展こそ本部会の継続的な使命でしょう。それには、若い方々が本部会・e-div で耳新しい問題、馴染み薄な考えや手法に積極的に向き合い、互いの関心を重ねつつ力を尽くすこと、そしてそうした環境の向上を図りうる部会運営が肝要と思われれます。